

2020. 3. 11

No.217

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,500円)



普段の暮らしを大切にしましょう



撮影：2月27日江別市郊外で芦別岳方面を見る
左から中天狗、北尾根派生1490峰、芦別岳
本峰、1682峰

春めいてきましたが、世界中で新型コロナ・ウィルスの拡大が止まりません。読者のみなさまも先の見えない不安で落ちつかない日々を送っていらっしゃるのではないのでしょうか。3月10日の時点ですでに全国で感染者は1200人以上。北海道の感染者も100人を超えています。私は自宅で本を読んだり、散歩したりして、平穩を心がけています。

ダイヤモンド・プリンセス号で、長い期間船内に閉じ込められていた乗客に、もっと適切な対応ができなかったのか？と疑問が残りました。感染症に詳しい専門家の方たちに相談していただきたかったと思います。感染拡大が進行しているのに、安倍首相は仲間内や大企業のトップと何度も会食していたのは信じがたいです。いきなり、小中高生の一斉臨時休校を発表したので教育現場は大混乱しました。共働きやひとり親が安心して仕事ができるような体制を考慮してほしかったです。地域によっては、休校の必要があったのか疑問です。今やるべきことは、コロナの迅速な検査体制、たくさんの病院で治療が受けられるような発熱外来の新設や人員確保ではないのでしょうか。国は正しい情報をいち早く伝えてください。それだけで私たちの不安は軽くなると思います。

3月2日の素粒子(朝日新聞)を引用します。「『私の責任で』。抽象的な精神論に満ちた首相の言葉。国民が聴きたいのは、具体的な判断基準と効果なのだが。英断かそれとも独断か。首相の判断。今度こそ記録や文書を捨てたり変えたりしないでね。歴史の検証に向けて。国民のために野党も危機対応に協力を。当然である。ならば政府・与党も疑惑解明にぜひ協力を。国民の

ために」。3月3日の素粒子は「不安が募る。そんな首相に人権制限を含む『緊急時事態宣言』の発令をゆだねる法改正」と批判しました。私も人の行動が法で制限されるのは反対です。

植村隆さんの控訴審は2月6日は札幌高裁と、3月3日東京高裁で、判決を迎えましたが敗訴しました。

北海道新聞社説(2月8日)は「札幌高裁は『推論の基礎となる資料が十分にあったため、本人への直接の取材が不可欠だったとはいえない』と判断。」「『桜井氏は(植村氏)本人に取材しておらず、植村氏が捏造したと信じたことに相当な理由があるとは認められない』とする植村氏側の主張を退けた。」東京高裁では西岡力氏らを訴えましたが、同様の判決を言い渡したのです。司法の良心はどこに行ったのかと怒りでいっぱいです。

「植村さんを支える仲間たち」の呼びかけ人の水野孝昭さんは「高裁判決は、慰安婦報道を攻撃する言論に対してだけ『真実相当性(真実でなくても、そう思い込んだことに相当の事情がある)』を例外的に甘くして認めている、と言わざるを得ません。『強制連行』や『慰安婦』の定義から現政権の見解をうのみにして踏襲する判決が続くことに、『司法は独立した判断を下すはず』という私たちの期待が間違っていたのだろうか、とまで危機感を覚えます」と述べています。今までの裁判の軌跡は<http://sasaerukai.blogspot.com/>をご覧ください。

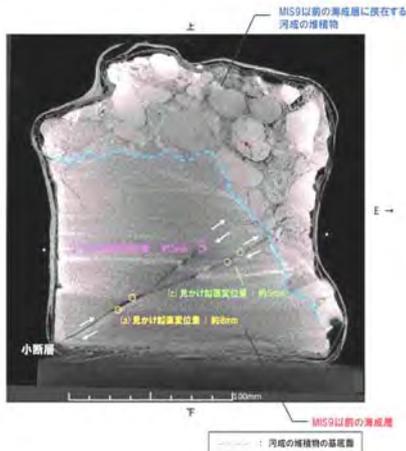
昨年7月に参院選で、自民候補の応援演説をしていた安倍首相にヤジを飛ばした男性らを道警の警察官が取り押さえて排除した問題で、男性らが告訴していましたが、札幌地検は2月25日「正当な職務行為」として不起訴処分になりました。プラカードを掲げた女性を取り囲んだ行為についても事実を確認できなかったため「嫌疑なし」としたのです。新たに24歳の女性が提訴しました。「表現の自由」は憲法で保障されています。まるで戦前ではないかと恐ろしさを覚えました。2月24日に北海道放送がドキュメンタリー「ヤジと民主主義～警察が排除するもの」として放送されました。私が一番驚いたのは「増税反対」と叫んだ女子学生を、女性警察官が後方に連れていき「飲みもの買ってあげるから従ってよ」と言ったこと。「老後の生活費2000万円貯金できません」と書いたプラカードを掲げて無言の抗議をした女性も排除さ

れました。警察にここまでやらせるのは安倍政権のおごりではないでしょうか。「プラカードを掲げるのは誰にでもできる権利。それを奪うのは民主主義ではない」と、抗議した女性の姿も忘れません。荻野富士夫小樽商大名誉教授(日本近現代史)が戦前の治安維持法のもとで、市民の言論や思想の自由を奪った歴史を語っています。警察の狙いは、ここで取り締まれば、市民は萎縮するだろうという狙いだろうと指摘しました。丁寧な取材が光る番組でした。是非、ご覧ください。【HBC「もんすけTV」】でどなたでもご覧になれます。https://www.hbc.co.jp/monsuketv/tv/yaji_democracy.html
3月31日(火)配信終了

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から9年になりました。原発事故の影響で、避難指示が解除されても、避難生活をしている人は4.8万人もいらっしゃるそうです。日本も早く脱原発に舵を切ってほしい。科学者の小野有五さんらが、泊原発敷地内の活断層を証明しました。泊原発を廃炉に持ち込みたいですね。

1枚のCT画像が泊原発敷地内の活断層を証明!

写真: 2019年11月7日の規制委審査会合に出された北電の資料(砂層と砂利層境界部のCT画像)



F-1断層から続く小断層が、砂利層との境界(青い破線)で止まっていると北電は言いますが、断層は、破線を突き抜け砂利層に入っているのがはっきり見えます!

2019年2月の審査会合で、原子力規制委員会、泊原発1号機の下を通るF-1断層を、新規規準による「活断層」であると断じました。しかし、再稼働を目指して敷地内の活断層をあくまで否定したい北電は、「規制委が活断層とする小断層群と、F-1断層は連続していない」と強く反論し、それを証明する追加調査をするので、秋まで待ってほしいと、結論の先送りを図りました。

2019年11月に、北電は追加調査の結果を報告しましたが、驚くべきことに、2月までの主張を180度転換、「小断層群とF-1断層は連続している」と主張したのです。しかし、それには裏がありました。こんどは、「小断層群のうち3本が、33万年前の古い地層との境界でピタリと止まっていたので、小断層は33万年前より古くなるからF-1断層も活断層ではない」と主張したのです。そして、11月15日には、規制委が現地調査を強行、雪で地層もよく見えないなか、規制委も北電の主張をほぼ承認してしまったのです。

たしかに北電の撮った崖の写真だけを見ると、小断層は北電が33万年前と言っている川の砂利層との境界で止まっているようにも見えます。しかし、北電は、大きな

「ごまかし」をしていました。この砂利層は川底にたまったあと、周氷河作用で大きく変形していたのです。周氷河作用とは、氷河期に大地が深くまで凍り、夏にも融けないで「永久凍土」になったり、大地の表層部が凍結・融解を繰り返したりして、表層物質が変形・移動する現象です。今でも冬には大地がしばれ、地面が持ち上がったり(凍上)しますが、それが大規模に起きたのです。ですからこの砂利層も、実際には大きく乱れているのですが、北電はそれをまったく認めず、ただ、小断層があつて砂利層に切られているだけと主張したのです。しかし、小断層が、北電の言うように砂利層の境界でピタリと止まっているのだとしたら、それは逆に、このような変形のあとに小断層が起きた証拠になります。もし断層のほうが前だとしたら、周氷河作用を受けたときに境界部も乱れますから、下から直線的に延びてきた断層が、そのままのかたちで残ることはあり得ないからです。

しかし、いくらこういうことを言っても、そもそも周氷河作用をこれまで全く認めてこなかった北電は、そんなものはなかったのだ、と主張するだけでしょ。そうすると水かけ論になってしまい、規制委も、それは一部の学者が言っているだけのことだ、と無視してしまうかもしれません。

なんとか、誰が見ても、北電の主張が誤りだと言えるような証拠がないだろうか、と北電が出してきた膨大な資料を全部チェックしてみました。そうしたら、砂利層との境界部分を撮影したCT画像に気づいたのです。パソコン上で拡大してよく見ると、写真の左下から延びている小断層は、砂利層の境界をつきぬけて、そのまま砂利層のなかにまで入っているではありませんか。

みなさまもぜひご自分の目でごらんになってください。たとえ北電が周氷河作用を否定しても、F-1断層につながる小断層は、確実に砂利層を切っていることが誰の目にも明らかになったのです。ですから、F-1断層は、12.5万年以降の活動を否定できません。まさに活断層になるのです。北電の出した資料で、北電の主張が根本から崩れた瞬間でした。(小野有五:「行動する市民科学者の会・北海道」)

このことを岩波書店「科学」2月号に発表したばかりです。「科学」のウェブサイトには、泊原発が建つ前の敷地が、もともと、周氷河作用を受けて、なだらかになった周氷河地形であったことを示す写真も載せてありますので、ごらんください。

<https://www.iwanami.co.jp/kagaku/0no202002suppl.html>



ウトナイ湖のオオハクチョウ

Books



熱源

川越宗一著 文芸春秋
2,035円

今年、直木賞を受賞した作品で、明治から第二次世界大戦の終戦まで、樺太に生きたアイヌ、ヤヨマネクフとポーランド人で、ロシアから樺太に送られたブロニスワフ・ピウスツキの二人を軸として展開されます。

樺太に住むアイヌは支配権をめぐる日本とロシアに翻弄され、日本に帰国し江別の対雁(ツイシカリ)に移住。少年のヤヨマネクフらは和人の差別にさらされ学校でも蔑まれます。でも幼なじみたちと力を合わせます。ヤヨマネクフは美しく、琴(トンコリ)の名手キサラスイに恋し結婚し、子どもにも恵まれますが、村に流行した痘瘡(天然痘)が妻を奪いました。

江別市郷土資料館によると、政府は樺太アイヌに対し「日本へ移住しないと日本人としての権利を認めない」と布告を出し、北海道への移住を促したそうです。いったんは樺太が望める道北の宗谷地域に移ったのですが、その後、対雁に移動させられます。そんな折に疫病が集落を襲います。史実によると、対雁集落は330人が命を失い壊滅状態になったとのこと。

ヤヨマネクフは悲しみを抱えて、妻との約束を守って息子を連れて樺太に帰郷。ブロニスワフはロシア皇帝の暗殺に関与したとして樺太に流刑になります。ブロニスワフはギリヤークの人々との交流から民俗学を学びます。そこで出会ったのが樺太アイヌでした。ヤヨマネクフとブロニスワフは互いに痛みを抱えていて共感。少数民族が自立できるようにと、学校をつくるのに奔走します。しかし日露戦争の混乱に巻き込まれ、学校運営は困難を極めました。ここでも和人はアイヌの人々を土人と言って蔑みます。自分が和人の側にいることに申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。何度も和人が叫ぶ、「土人」という蔑みの言葉が恥ずかしくてならなかったです。ヤヨマネクフは北海道にいても樺太にいても、アイヌ民族は土人、劣った人種としてしかみなされていないことに、憤りを感じ、その焦燥感は、ついには、彼を南極大陸探検の犬橇係に立候補させるのです。

ブロニスワフは、蠟管レコードにアイヌの歌と琴を記録します。ヤヨマネクフは「私たちは滅びゆく民と言われることがあります。けれど、決して滅びません。(略)この録音を聞いてくれたあなたの生きている時代のどこかで私たちの子孫は変わらず、あるいは変わりながらも、きっと生きています」。著者は、生きるための熱の源は人だ。人によって生じ、遺され、継がれていく。それが熱だと書きます。ヤヨマネクフに「強いも弱いも、優れるも劣るもない。生まれたから、生きていくのだ。すべてを引き受け、あるいは補いあって。生まれたのだから生きていいはずだ」と語らせるのです。

主人公の二人は実在した人物で、アイヌ語研究者の金田一京助や、南極観測隊を率いた白瀬蘆も登場します。壮大なスケールと躍動感あふれる描写に引き込まれました。儼然と映像が浮かぶようでした。最近読んだ私のベストワンです。

証言 沖縄スパイ戦史

三上智恵著 集英社新書
1,870円



昨年、札幌映画サークルの上映会でドキュメンタリー映画「沖縄スパイ戦史」を観た衝撃が忘れられません。沖縄戦で県民の4人にひとりが死んだと言われていますが南部の沖縄戦の悲惨さは語られても、10代の少年らで構成された「護郷隊」でゲリラ兵として戦った人たちがいたことはあまり知られていませんでした。

生存者が少なくなる中で、監督の一人である三上智恵さんは、10年間も丹念な取材を重ね、膨大な資料を見つけ出し、沖縄の歴史を追いました。今回は映画に登場しなかった人々にも会い、31人にも及ぶ関係者に当時の様子を聞き書きしています。新書でありながら750ページの労作です。

第1章の 陸軍中野学校出身の将校らによって沖縄で創設された「護郷隊」という少年兵部隊の元少年ゲリラ兵たちの証言は、どれも昨日のこのように鮮明で生々しい。戦死した友人の手だけを切って持ち歩いた人や、人を殺すのが山羊を殺すより容易といった人。少年兵どうしでのビンタなど。戦争に対する罪悪感はなく高揚感があったことに驚きを覚えました。それでも兵士が死ぬときは「お母さん」と叫んだと語ります。ある人は、住民をスパイだと疑って殺した悪名高き海軍の渡辺大尉の隊に入れられ、戦後もしばらく山中で潜伏生活を送らざるをえなかったことや、無残なスパイ虐殺の事実を語ります。また別の人は少年兵同士の処刑について、伝聞の形だが貴重な証言をします。映画にも登場した瑞慶山良光さんは、長く戦争PTSDに苦しめられました。彼の遺体処理の話は凄まじいほど生々しい。兵隊幽霊と言われるような狂態を示し、座敷牢に監禁され、その後精神病院の独房に収容されました。私はこの人の人間性に惹かれました。映画で今は死んだ戦友の数だけの緋寒桜を植え続け、平和を祈る姿が印象的でした。三上さんは、語りたくないような記憶を引き出しているのが圧巻。しかも全て実名です。今、過去に向き合わなければ真実は伝わらないという三上さんの思いが語らせているのだと思いました。

第2章「陸軍中野学校卒の護郷隊隊長たち」では「護郷隊を率いた二人の隊長」として、村上治夫第一護郷隊隊長と岩波壽第二護郷隊隊長が取り上げられています。「護郷隊はそのような補助的な役割ではなく、戦闘員として射撃や擲弾筒の技術を習得、敵陣に潜入して情報を取り夜間爆破する訓練など、スパイ・テロ・ゲリラ戦・白兵戦を15~16歳の少年を主力に実践したという点では他に類例がない。この少年らを訓練し、共に山で遊撃戦にあたった、護郷隊の隊長ら幹部およそ15人は、陸軍中野学校を出たばかりの22、23歳の青年将校や下士官たちだった。言ってみれば、本土から来た大学生が島の中学生と高校生を訓練して戦争をさせるようなもので、戦争末期とはいえ、こんな法も道義もかなぐり捨てた無茶な作戦を当時の大人たちが東京から平然と下命していたことに驚きを禁じ得ない。間違いなく日本戦史に残る大きな汚点だと言える」と書いています。

その一方で、少年兵からは慕われていて、戦後は、亡くなった兵士の慰問を欠かさなかったり、生き残った少年らの就職の世話などとした事実も書き、彼らに人間的な息吹を感じていることに三上さんの温かさをみました。そうであっても、村上隊長には日本政府に戦争責任を追究していただきたいかったです。岩波隊長の長男が「国に褒章など絶対にもらわん」と言っていたことや自民党嫌いだったことも紹介しています。

庄巻は第4章「スパイ虐殺の証言」です。虐殺には日本兵だけではなく沖縄の住民も関わっていました。その事実が、多くの人たちによって語られます。スパイだと疑われた者たちは、日本軍の手で、そして住民自らの手によって殺害されました。その裏に「スパイリスト」の存在があったのです。リストに挙げられた住民が次々に同じ住民によって虐殺されました。本島北部の殺人行為などを「今だから話せる国頭(くにがみ)の住民虐殺」として詳しく証言しています。映画でも登場した当時18歳だった米ちゃんの証言は215号の映画紹介で書いたので省きますが、米ちゃんは戦後、当時の秘密を何十年も語れずにいたことを本書で知りました。今ようやく語られたのは、同じ地域で、虐殺された人、虐殺した人が住んでいて、長くこのことはタブーだったからです。三上さんは「スパイ虐殺の犠牲者を『戦死』と捉えたり、『戦争が殺した』と罪を霧散させる言い換えをすることは、事実を見誤る行為」だと書きます。

三上さんはあとがきに、「人は過ちを犯す存在だからこそ、過ちの記録こそが次の過ちを未然に防ぐ地図になります」と書きました。75年前に起きた沖縄の秘密戦は、過去のものではないと訴えます。宮古島などの南西諸島には自衛隊のミサイル基地の配備が進んでいます。日本軍の本質は自衛隊に引き継がれています。集団的自衛権、特定秘密保護法が、多くの憲法学者や市民の反対にも関わらず通ってしまい、戦争への危機を強く感じます。是非、読んでいただきたい1冊です



故郷の味は海をこえて「難民」として日本に生きる

安田菜津紀著 ポプラ社 1,540円

フォトジャーナリストとして活躍し、サンデーモーニングでコメンテーターもされている安田菜津紀さんの新刊です。

ニュースだけでは知り得なかった、さまざまな国から、命からがら日本に逃げて来た人々の苦難と故郷の味を語っています。安田さんが2018年春、激しい戦争が続いているシリアで朝食を食べていた時でした。店員さんたちが、みな温かく迎えてくれて次々出される懐かしい味に、初めて訪れた10年前を思い出し、涙が止まらなくなりました。安田さんは気が付いたのです。食べ物はまだお腹を満たすものではなく、その味は心の奥深くに眠っていた、大切な誰かとの思い出をやさしく呼び起こすものだ。故郷の料理を通して日本の人たちに届けようと書かれたのが本書です。シリアやミャンマー、カンボジャなどの難民だった人たちが、その国の食の文化を伝えます。難民問題は、遠い国の出来事ではなく身近な隣人のことだと書きました。

一番身近に感じたのはネパールで拷問から逃れて、日本に来たケーシーさんの体験でした。ケーシーさん

はマオイスト(毛沢東主義派)に命を狙われ、自宅を襲われ焼かれてしまったのです。ケーシーさん一族は国王を支える側だったからです。2007年に来日後、何度も難民申請をしましたが、長く認められませんでした。ケーシーさんは故郷に残っていた、破壊された自宅の写真や拷問を受けた後に治療を受けた病院記録などを証拠として提出し、「難民申請が認められないのはおかしい」と「異議申し立て」をして、2015年によりやく難民認定を受けることができました。その間に結婚もし、愛知県豊川市に暮らし、スパイスの輸入などを手掛けています。

ケーシーさんがつくるのは定食「ダルバート」豆のダルカレーにキノコや肉の炒め物、カリカリに揚げたゴーヤが添えられます。ネパールで食べたピリッと辛いカレーを思い出しました。

私がヒマラヤ環境調査で、ネパールに行ったのは2008年です。私もポカラに行きました。そこにはチベット難民の暮らす村がありました。宗教の自由を求めてデモに参加した若い僧侶たちが中国の軍隊に殺された写真が何枚も張り出されていました。本書を読みながら、その日の光景を思い出しました。

2018年に日本で難民申請をした人びとは1万493人もいます。それに対して、同じ年に難民認定を受けたのは、わずか42人です。日本は難民に優しいと言えるでしょうか？ 難民認定はたったの0,25%です。恥ずかしくなりました。安田さんは「そうした人びとを支えていくのは、負担ではなく、社会に生きる一人一人として自然なことではないでしょうか」と訴えます。同感です。

7人とその家族が難民として生きてきた道のりを、思い出のつまった故郷の料理からひもといた本でした。是非読んでください。売り上げの一部はNPO難民支援協会の活動に使われます。

安田さんの講演を2年ぐら前に聴きました。その時の語り口のまま、文章は温かく、語る人も自然体です。



過去から学び、現在に橋をかける

日朝をつなぐ35人、歴史家・作家・アーティスト

朴日粉著 梨の木舎2018年発行

当時、朝鮮新報論説委員だったパク・イルブンさんが連載した記事をまとめた本です。

冒頭は斎藤美奈子さん。「トランプ政権の移民問題をクローズアップしているが、自分たちの差別問題、排外主義をどうするんだ。その意識がメディアにはない」「まずはじめませんか、地域で在日の人たちと友だちになることから」と提案します。

今は亡き詩人の辻井喬さんは、朝鮮学校の子どもの「無償化」実現を求める声に当然のことだと賛同されました。作家の辺見庸さんは「この国が敗戦を機に反省したとされてきたことが実行されずに、逆に歴史が覆されてしまっている。『慰安婦』問題、強制連行、南京大虐殺、あるいは、日本が朝鮮で何をどうやったのかを忘れ、いわば『歴史認識におけるクーデター』が起きてしまった」と指摘しています。

格差社会の不条理を
笑いと悲哀とサスペンスで描く

『パラサイト 半地下の家族』
樋口 みな子

札幌映画サ
ークル
シネアスト2
020年3月号
掲載



2月に開かれたアカデミー賞で、韓国のポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』が英語以外の言語の映画で初の作品賞を獲得。監督賞、脚本賞、国際長編映画賞と合わせて最多の4冠は歴史的快挙！に感動しました。

『殺人の追憶』はポン監督の長編作品2作目にして韓国のみならず世界的な大ヒットを記録し一躍名を世に知らしめました。韓国で実際に起きた未解決連続殺人事件に基づく戯曲を原作とし、緊張感あふれる映像で実写化。ソン・ガンホが主演しています。『パラサイト』は昨年カンヌ映画祭でパルムドール賞を受賞。本作でもガンホが怪演。予測不可能な展開に一時も目が離せませんでした。

キム家は大黒柱のギテクを筆頭に家族みんなが失業中の半地下暮らし。窓から見える景色はゴミの臭いが漂ってくるようだし、Wi-Fiも繋がらない。水圧の関係でトイレが1番高いところに設置されている。ゴキブリやコオロギが、当たり前にも食卓にいます。大雨が降れば、周辺のごみと一緒に水浸しになるような家。

浪人中の長男ギウは海外に留学する友人から、大金持ちのパク家の女子高生の家庭教師を頼まれたことから、ギウが練りに練った計画で、家族4人が1人、また1人と、巧みにパク家に入り込んでパラサイト(寄生)。パク一家も金の亡者ではなく、いかにも善良です。キム一家は劣悪な環境から、快適な豪邸に通いだすのです。可笑しくて、ユーモラスで痛快。

半地下の貧困と、高台の瀟洒な建物が格差社会を象徴します。高台からは美しい庭が素敵です。窓から見える風景の違いや、半地下と高台の高低差で見せる映像が秀逸。

階段と雨が実に効果的に使われていたのも印象的。監督は「金持ちの家から浸水した自分たちの家までは気が遠くなるほど離れていて、観客も垂直的な距離やギャップを一緒に感じるわけです。水も豊かな者から貧しい者へとずっと注がれ、流れおいていく。その流れを止めることはできません。これは本当に怖く、悲しいことでもあります」とインタビューに答えています。ちなみに実際に家賃が格段に安い半地下に住んでいるのは、2

015年の人口住宅総調査で国民の1.9%(約36万世帯)というから、深刻です。韓国人労働者の35%が非正規で大卒でない人や、大学は出たものの就職に失敗した人は底辺生活になるという現実があります。『パラサイト』が世界中で大ヒットしたのは、資本主義の行きすぎが、韓国だけでなく、日本、イギリス、アメリカと先進国の中で貧困が広がっているからでしょう。リアルさに、ブラックユーモアを交え、社会性とエンターテインメント性を備え、観客を驚かせました。社会で絶え間なく拡大していく二極化と不平等というテーマは避けられない課題です。

ある日、パク家は息子の誕生日祝いで、キャンプに行くと言いだします。愛犬の世話を、家政婦を追い出し、後釜で住み込んでいたギテクの妻チュンスクに任せ、キャンプに出発したパク一家。ひとり豪邸に残されたチュンスクは、他の3人を呼び寄せ、まるで自分の家かのようにふるまいます。手入れされて綺麗な庭園で、それぞれが暖かな陽射しを浴びながら読書をしたり、ゆったりとお風呂に入ったりと快適に過ごします。夜はみんなでリビングに集まり、テーブルを囲み、お酒を酌み交わします。ギテクは「何もプランはない。そうすれば失敗しない」と息子に言います。その言葉にはいくら努力してもどうにもならない庶民の諦めがにじんでいました。

その時、突然チャイムが鳴ります。ここから物語はサスペンスの様相を呈し始め、怒涛の展開。人間の本性が露わになります。悪気のない雇い主のひとに差別意識と格差社会の残酷さが潜んでいました。思えば、留学した友人は、なぜ大金持ちの女子高生の家庭教師をギウに頼んだのか? 超えられない格差に二人が恋仲になるとはあり得ないと思っていたのではないかと、誰一人として悪人がいるわけでもないのに、社会の歪みが事態をとてつもない方向に転がしていくのです。この二つの家族は、いつでも入れ替わることができるのではないかと、思わせるように描かれていたことが、今の時代を表していました。

荒唐無稽なラストに向かって突っ走るのについていけない思いながら、いつの間にか心をわしづかみにされました。格差社会の不条理と闇の深さに慄然としました。誰かに語りたくなる傑作!

(C)2019 CJ ENM CORPORATION, BARUNSON E&A ALL RIGHTS RESERVED



リンドグレーン

ペアニル・フィ
シャー・クリステン
セン 監督

「長くつしたのピ
ッピ」や「ロッタちゃん」

の名作児童文学を通して世界中の子どもたちから愛されるアストリッド・リンドグレーン。この映画は少女から大人になっていくアストリッドが古い因習や道徳観に抗い自由に生きようとする姿が生き生きと描かれています。

スウェーデンのスモーランド地方。兄弟姉妹と自然の中で伸び伸びと育った少女アストリッドは思春期を迎え、より広い世界や社会に目を向けるようになっていきます。

町のダンスパーティーでは、少年からダンスに誘われず、女友達を誘って踊り出します。友達が先に帰った後ひとりでジャズのナンバーにあわせてステップを踏むアストリッド。その帰り道、彼女は大声で叫びます。誰にも理解してもらえない彼女の孤独と葛藤を吐き出すように。

自由奔放なアストリッドは教会の教えや、保守的な田舎の因習や男女の扱いの違いに息苦しさを覚えます。文才を見込まれ新聞社で助手として働き始めます。その後は認められ記者に。先妻を亡くし7人の子どもと暮らす編集長は後妻と離婚訴訟中です。その編集長に恋をし、思いもよらず妊娠。激怒する両親との葛藤の結果、街に出て秘書学校に入ります。隣国デンマークで出産し里親マリーと出会います。愛情深く、アストリッドの息子ラッセを育てるのが印象深い。さすがに福祉国家ですね。ラッセがマリーを慕い「ママ(里親)ののところにいきたい」と抵抗するのが切なく、涙しました。離婚訴訟は長引きますが、わずかの罰金支払いで済み結婚しようと求婚しますが、少しも息子を引きれずに苦しんだことを理解しない彼にノーと言います。

アストリッドはラッセに想像力を膨らませて物語を語り、ラッセとの距離を縮めていくシーンは、未来の作家を予見するようでした。

監督は“私を形作った人”とリンドグレーンを敬愛し、彼女を形作ったものは何なのかと探究したのが本作です。

アストリッド役のアルバ・アウグストが自由闊達な少女から、苦悩しながら、母として大人の女性になっていく姿を表情豊かに演じて感動しました。子どもらしい冒険心を奔放に解き放った、作品の背景が分かったような気がしました。「あなたが母親よ。あなたなら大丈夫」と励まし続けた慈愛あふれるマリー(トリーヌ・ディルホルム)がいい。後の夫になるリンドグレーンのさり気ない優しさも良かった。

リンドグレーンの『暴力は絶対だめ』や『リンドグレーンの戦争日記 1939-1945』も読んでみたい。



リチャード・ジュエル

クリント・イーストウッド監督

映画の舞台は、五輪に沸く1996年の米アトランタで

の爆破テロ事件。多くの聴衆が集まる音楽イベントで警備員を務めていたリチャード・ジュエル(ポール・ウォルター・ハウザー)は、たまたま爆発物の第一発見者になり、職務を誠実にこなすことで被害を最小限に食い止めて、一夜にして国民の英雄となります。その3日後、FBIがジュエルを容疑者としてマークしていることを地元紙が報じると一転。犯人扱いされるのです。

センセーショナルな出来事が、マスメディアとSNSによって、事実を検証することなく、爆発的な速度で拡散されてしまう現代社会と重なりました。

警察官志望のリチャードは、警察やFBIに対して無防備過ぎました。リチャードは弁護士のワトソン(サム・ロックウェル)と無実を信じる母が立ち上がります。立ち上がったのはFBIとマスコミ、そしておよそ3億人の人口をかかえるアメリカでした。分かりやすいストーリーに人

々が飛びつき、検証もないまま嘘の情報が広まる怖さにぞっとしました。FBIの徹底的な捜査、メディアによる連日の過熱報道により、リチャードの人格は全国民の目前でおとめられます。

イーストウッド監督の批判精神は健在。これまでも『アメリカン・スナイパー』『ハドソン川の奇跡』『運び屋』など実話を基に“衝撃の真実”を描いてきました。いつもながら、重いテーマを小手先でなく直球で訴えました。

植村隆さんは真実を書いたにも関わらず、慰安婦記事は捏造だとされました。姿なき誹謗中傷がどれだけ人を苦しめるのかをこの映画で改めて考えさせられました。メディアはファクトチェックをきちんとしてほしいと思います。

メディアの役割は冤罪をチェックすることをこの映画は訴えています。多くの人に観てもらいたいです。

風の電話

諏訪敦彦監督



3.11の大震災と原発事故から9年になります。ベルリン映画祭で「風の電話」が若い世代に向けたジェネレーション14プラス部門に参加していた諏訪

敦彦(のぶひろ)監督が、特別賞を受賞しました。時々ふっと、ハルは元気に生きているだろうかと思ひ出します。

東日本震災で家族を失った少女の再生の旅を描いたロードムービーです。

広島叔母のもとで暮らす17歳の少女ハル(モトウラ世理奈)はある日、叔母が突然倒れ、自分の周りの人が誰もいなくなってしまう不安にかられて、震災以来一度も帰っていない故郷、大槌町へ向かいます。さまざまな人々との交流を経て、傷ついた心の救済や、人々が忘れかけている大切なものを映し出していきます。

豪雨被害にあった広島で年老いた母と暮らす公平(三浦友和)や、かつての福島の景色に思いを馳せる今田(西田敏行)などとの交流を通し、ハルは次第に光を取り戻していくのです。道中で出会った福島の元原発作業員、森尾(西嶋秀俊)に助けられ、ともに旅を続けるハルは、「もう一度、話したい」という強い思いに導かれ、故郷にある、「風の電話」にたどり着きます。森尾も津波で家族を失っていました。家族との思い出の自宅に森尾が帰った時、ハルには幻が見えていました。一面の菜の花畑にしぼんだ真っ赤なボールが投げられて、光と闇のコントラストがとても綺麗でした。ハルは家族を失いながら生きている現実を知ります。出会ったクルド人の少女は、故郷に帰れない悲しみも描かれます。たどり着いた我が家は土台だけになっていました。「ただいま」といっても返事はありません。「風の電話」の受話器を取ります。「お母さん、もう一度会いたいよ」と思いの丈を語る場面。今までの悲しみを吐露します。モトウラは全編を通して、過剰な演技をせず、ハルの悲しさを体現し、まるでドキュメンタリーのような感じでした。モトウラはハルが経験することを、そのまま自身の体験として内面化することができていたのが素晴らしい。モトウラが家族に即興で語り

かけるラストは10分にも及びました。その場面以外は口数は少ない。語らなくても思いが伝わってくる、その存在感に圧倒されました。

名もなき生涯

テレンス・マリック監督



第2次世界大戦中のオーストリアで、兵役を拒否して、人としての尊厳を守り抜いた名もなき農夫と家族の実話。テレンス・マリック監督の作品です。

山岳地帯の美しい農村で、農夫のフランツ(アウグスト・ディール)は妻ファニ(ヴァレリー・パフナー)と畑を耕し、母や3人の娘と共に平和に暮らしています。フランツは敬虔なクリスチャンで教会で奉仕もしています。厳しい山岳地帯で、力を合わせて農作業をする夫婦の姿が素朴で美しい。険しい山々の間に広がる田園を自然光で撮った映像に、登場人物の独白を重ねます。このまま平和が続けばいいのと思うが、時代がそれを許しません。

フランツに召集令状が届きますが、「罪のない人を殺せない」と拒否して逮捕、投獄されます。信頼していた司祭からは「祖国の義務だ」と言われ、残された家族は村人から村八分にされます。自分の信念を最後まで貫いた一人の男の生き様が、静かに心に迫ってきます。フランツはヒトラーへの反逆者として、暴行を受け続けます。それでもナチスのいうとおりにしている人々よりも心は自由だと語るのです。弁護士に「もうすぐ戦争は終わるのだから表面的に忠誠を誓えばいい」と説得されます。そんなフランツにファニが最後に贈った言葉には信頼と愛情があふれていました。たとえ処刑されても、自分の命は永遠だと信じて最後の瞬間に臨むのです。新約聖書の言葉がたくさんちりばめられていました。フランツという一粒の麦は死んだけれど、その死は無駄にはならない。次に、ナチスのような権力が現れても、今度はフランツのように抵抗する人は一人ではないでしょう。青々と実り榮える麦の穂がそのことを教えてくれました。

映画では村の教会の鐘、牛や羊の鳴き声、畑の草刈りなどの環境音とオーケストラと織りなされて心に深くしみました。人が自然に還っていくとはこういうことかなあと死も受け入れられるような気持ちになりました。

監督は「世界は今、この時代に逆戻りしている」と警告し、たった一人の静かな抵抗の大きさを伝えました。

安倍政権と内調の闇を暴いた映画『新聞記者』が日本アカデミー賞最優秀作品賞を受賞する快挙！主演女優賞、主演男優賞も

リテラ 2020.3.6から引用

快挙と言っていだらう。安倍政権を批判した映画『新聞記者』が、本日発表された第43回アカデミー賞で最優秀主演女優賞、最優秀主演男優賞、さらに最優秀作品賞を受賞した。

主人公の女性記者を演じたシム・ウンギョンが、最優秀主演女優賞。受賞を予想していなかったと号泣しながら、共演者たちへの感謝を述べた。

もうひとりの主人公・内閣情報調査室ではたらくエリ

ート官僚を演じた松坂桃李も、最優秀主演男優賞を受賞。これほど踏み込んだ作品のオファーを受けた理由を問われ「純粹にこの作品の根底に、いろんな情報があるなかで、自分の目で自分の判断でちゃんと意思を持つようっていうメッセージ性がしっかりと込められているなと思ったので」と答えた。

さらに最優秀主演男優賞受賞が決まると、松坂は『新聞記者』が世に出るまでの紆余曲折・苦勞をこう打ち明けた。

「この作品は、僕の知る限り、実現するまで二転三転四転五転ぐらい、いろんなことがあって。それでもこの作品を届けたいという人たちが集まって、撮り切ることができました。僕自身も10年ちょっとですけど、やってきて、ものすごくハードルの高い作品、役だと思っただけですけども、ウンギョンさんと一緒にお芝居できて、最後まで駆け抜けることができました」

映画公開にいたるまでたくさんの紆余曲折があったのも、演じることに高いハードルがあったのも、言うまでもなく、この作品が安倍政権の闇、とりわけ官邸の“謀略機関”となっている内閣情報調査室を描いた作品だからだ。(略)

権力者から直接的な命令はなくともその意向を忖度し、同調圧力のもと民衆同士も空気を読み合い監視し合う、ゆるやかな全体主義ともいえる安倍政権下の日本。そこで奪われているものは何か、それを打破するために必要なものは何か。

受賞をきっかけに、あらためてこの映画の突きつける問いを多くの人に受け止めてもらいたい。

(編集部)

日本アカデミー賞が発表になりました。予想通り「新聞記者」が3冠に輝きました。昨年8月5日発行の銀河通信214号でも紹介しています。

**購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
1月3日～2月21日**

井上昌和・浅川身奈栄 田村陽子 室田トモ子 安田成男 加藤多一 中村京子 小林嘉則 尾寄弘子 黒木沙会子 清水俊子 今美千代 岩淵雅輝 菅原三枝子 内田篤のり 藤島美佐子 久野真紀子 坂井京子 塩川哲男 芳賀孝郎・淳子 細川佳之・深雪 川原勝利 黒田忠 和田マサ子 小林千賀子 亀田法子 伊藤牧子 神成玲子 高橋儁 鈴木訓 阿保亘 伊藤康弘 藤谷和廣 喜多義憲 新西孝司 木村玲子 宮本紀子 富沢克禮 反橋一夫 岡村雄二 佐藤晃一 澤耕司 藤田トシ子

合計168,500円は印刷代と送料に使わせていただきます。多くの方が購読料にカンパも加えて振込んでくださいました。。中には1万円、2万円、3万円という方もいらっしゃる、期待にこたえられないのではないかと少し心配になりました。おかげで3回分の発行分が集まりました。ありがとうございます。紙通信購読の方は02740-7-56536(年間1,500円)です。電子振込が手数料がかからずお勧めです。またwebに変更する方もお知らせください。